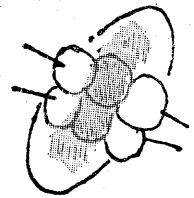


子どもをもっている親と音楽

徳丸 吉彦



まず、わが家の紹介から。子どもは、男の子が一人。今年
の五月で満六歳になり、目下、一クラス六十人編成の近所の
大幼稚園に通園。趣味は泥いじり、自転車乗り、ミニ・カー
とレゴ。彼の好きな音楽は、現代音楽とビートルズとアグネ
ス・チャン。妻はピアニスト。小生の好きな音楽は三味線音
楽。

このような家庭生活の経験から、そして、わが家に遊びに
くる音楽家や音楽家でない友人との会話から、そして、何人
もの子どもを観察した経験から、幼児と音楽について考えて
いることを、親への注文の形で、申し述べさせていただく。

☆子どもにも音楽を習わすより親が習うべし

現在の親の世代でも、かなり厳しい時代に育ってきている

はずである。ピアノは高かっただけでなく、気楽に習える環
境ではなかったはずだ。また、おじいさんやおばあさんの時
代とも違って、邦楽の習いやすい環境でもなかったはずだ。

「子どもにピアノを習わせたくて……」という母親、あるい
は、娘のレッスンについてくる母親は、ほとんどが、ピアノ
をひけない。ピアノを習わせたいと思うからには、ピアノを
いいものと考えているのだろう。それだったら、なぜ自分が
習わないのか。これが現代の最大のナンセンスである。厳し
い経済条件の中で、一人分しかレッスン料が払えないなら、
今まで悪い条件を我慢してきた親にこそ、まず習う権利はあ
る。子どもたちは、習いたければ、もっと後でやれ、という
わけである。

こうして、親たち（父親も含めて）が好きな音楽を子ども

をおしつけてやり始めたときに、幼児と音楽の関係は正しいものとなるのである。こう主張する私には、二つの理由がある。第一の理由は、「聴くこと」の重視につながり、第二の理由は、「知的好奇心の育成」に関係する。

☆子どもがよく練習するからといって喜ぶべからず

多くの親の誤りは、第一の理由とかがわっている。音楽教育といえば、演奏教育だと思ひこんでいる人がなんと多いことか。音楽がわかるとは、音による構造が（無意識的にでも、あるいは音楽用語をまったく知らなくても）とらえられることである。そして、作品と作品との関係がとらえられることでもある。これは聴いてわかることである。だから、聴くことは、音楽教育の出発点であり、目的である。ひいたり、歌ったりするのは、聴くためである。

まず、ある曲を耳にして、自分で演奏して、聴いてみたい（もちろん、演奏には運動の楽しみも加わる）と思うのが自然であろう。ひきたいと思うにも、聴いた経験がなく、先生に与えられた曲だけを、だまってひいているだけの子どもが多くなっている。なまじ、早くから教育を受けているので、音楽大学には進学できるので、かえって不幸なぐらいであ

る。この傾向は、ピアノ科に特に目立つ。ベートーヴェンといえは、ピアノ・ソナタだけしか知らないというのは、ピアノ・ソナタもよくわかっていることにならない。そういう大学生の親にならないためにも、子どもたちが聴くことをほめてやってほしい。少なくとも、じゃましないでほしい。

☆親は好きな音楽をやるべし

子どもにとって大切なのは、よい環境を作ってやることである。「よい」環境というと、子どもが音楽を練習しやすいだけでなく、親の暖かい応援を考える人が多いことだろう。冗談じゃない。その逆である。親が好きな音楽をひいたり、聴いたりしていればいいのである。小さな子どもを無理にピアノの前にすわらせるよりは、親が熱心にピアノをひいて、子どもがひかせてくれといつてから、楽器にさわらせてもよいではないか。

よい環境とは、刺激が豊富にある環境である。これが創造的な聴き方を生む下地になる。子どものためにレコードをかけた、かけてあげたりするとよい、というと、保育園や幼稚園で慣習的に歌っている音楽をかければよいと思っている人がいる。子どもがあきあきしている歌を、家でもかける必要

はない。違う音楽をかけて、刺激を豊富にするべきなのである。それでは、どんな音楽を、と必ずきかえされるものだ。私の答は、まず親が好きなものを、である。

どんな音楽であれ、親が楽しそうに、あるいは熱心に聴いていれば、子どもたちは、人間とは音楽を聴くものだという、最も根本的なイメージをもつことができるだろう。親が子どもの教育を考えすぎて、いわゆる名作を無理して聴いたりするのはおかしい。音楽以外の面では、親の判断を押しつけているのに、音楽だけ、自分の判断を遠慮するのは、親の功罪を自覚していないことを示している。

☆楽譜の読めない親も自信をもつべし

楽譜、とくに、五線譜が読めないと、つい「私は音楽がわからなくて」といってしまいがちである。楽譜なんか全然知らない人でも、民謡の上手・下手の判断ができる人は多いはずだ。このことからわかるように、親に必要なのは、楽譜の知識ではなく、音楽を聴いた経験なのである。

五線譜というものが広く使われているので、あれさえわかれば音楽が正確にとらえられると思っている人がいるが、これこそ大きな誤解である。西洋音楽についても、大体十六世

紀までの音楽は、別な楽譜を使用していたし、現代の音楽では、図形によって記譜されることも多いので、ここでも、五線譜だけではどうしようもない。そして、もっと基本的に重要なことは、楽譜が示しうるのは、音の高さと長さとその順序なのであって、本当に音楽らしい部分は、耳と身体で伝承され、あるいは工夫されるものなのである。

昨年、新内節の演奏会で聴いていたら、職人風の中年男が、突然いすから立ちあがり、歯切れのいい口調で、「エエ、こんなものがきいていられるか……」と出して出ていってしまった。次の上手な演奏では、また戻ってきて、いい処では掛け声をかけていた。この男は、三味線の譜も五線譜もきくと知らないだろう。しかし、真に音楽的な部分については、的確な判断ができるのである。

親の中には、子どもに聴かせるのは西洋音楽に限ると考えている人たちもいる。自分が西洋音楽が好きなら、それでよい。しかし尺八や長唄をやっている親までが、そう考えたら、これはおかしい。

大体、義務教育で扱われる音楽は、九割までが西洋の十八、九世紀の音楽またはそれをモデルにした作品なのである。中世やルネッサンスの多くの作品も、現代の作品も、ほ

とんど関係ない。アジアやアフリカの音楽もしかり。日本音楽は、多少改善されたとはいえ、鑑賞用に毎年数曲教えられるだけである。

親が自分の好きな曲を聴いていて、それが学校で習うものとかけ離れていたなら、結果的にバランスがとれるわけなので、むしろ望ましいことではないか。

☆音楽がよくわかるつもりのおもも遠慮せよ

今度に逆に、音楽をよく知っていて好きな親が、かえって子どもを抑圧する場合についてである。

第一の型は、いわゆる西洋クラシック音楽だけが音楽だけだと思っていて、子どもが歌謡曲を聴いてもロックを聴いても反対する親である。歌謡曲だけが大衆の歌だという発想は、非論理的であり、自分たちが音楽産業に管理されていることを知らないおろかさ、を示している。しかし、歌謡曲を魅力ある音楽の一つと思えば聴くだけであり、これをベートーヴェンから区別するのは趣味の問題でしかない。

第二の型は、子どもには「やさしい」教育用音楽を与えようとする親である。たとえば、西洋の古典的な歌を習う場合には、音程やリズムについて、ある順序が必要なこともあ

る。しかし、音楽作品というのは、複雑な構築物で、親がむずかしいと思っても、子どもの方は同じ作品の別な側面を聴いているかもしれないのである。ベートーヴェンの交響曲の形式感を聴かずに、音色と音量の変化を楽しんでいる幼児もいるのである。自動車の形を少しも覚えられない母親が、パッとみただけで自動車の型や年式をあてられる四歳児たちに、キュービズムの絵はまだ、むずかしいなどといえるだろうか。

研究はまだ進んではいないが、音楽の知覚についても、自動車の形のようなことがあるように思われる。楽器の音色の識別や歌い方の識別では、音階のけい古のできている大人よりも、幼児の方がすぐれていることだであるのだ。

これからの親たるもの、自分たちがすでに知っている音楽が、本当にごく限られたものであることを自覚し、また、音楽をイデオロギーで判断することを避け、できるだけ豊かな刺激を準備するようにしたいものである。そのためには、この際、子どもをほっておいても、まず自分の音楽活動を大切にして、十年後に、「親があつても子が育つ」などといわれないようにしようではないか。

(国立音楽大学)